本朝文鑑

巻二
巻三

へ5
2229
2

本朝文鑑 第二

賦類

硯賦　既望賦　涼賦　將棊賦

讀將棊賦　日和山賦　悠然賦　好色賦

行類

水波行　万歳行

吟類

雨夜吟

曲類

都曲　田舎曲　東曲　舞子曲

賦類

硯賦　北季吟

物とりてあそひてかの志と失ふハ惜しき人のいましめ
なからそれも文房のうちにかきりてハあれハやむことなし
あるへうもあらむのもれあらさるか学ふ薄き素性
そしやもさの静なる和に会なしとこそあるも
いとのしるなるやはたそれの端れくあるかたらも墨
まさなるもゆかりてなし何ともふくみむひはく人
あれなとひともみへなりし文月の比の手のゐるよま
硯のかきとかきねて物てほむしのおきさむのたつさし文集

の中ともかはしてむほうそひしさのそとあらそいへの筆の
はるの眺めききをかたる雪とあつむる雲のふもこころりと
それく深はおなむし此かたる念をすめりれて京ゆよ
さへくもおしみえて多りこも起されてハほかるよ翰
なのさくりへもさきかれてきむりてあなふ流るかくかもれ
るう物をのこさくあるてなりやへまかくておきさみる嘆
のそらぬ秋おしまつよまりてはらくさへいひらしよ
そらしまれなる世をまちとへなへてかつて々の
そもなひなへつきはのそくひあすきてなる中にねてハんと
すゆもきもひく人然あかしそいほら然をえるると

ことゝもころも病がかしし月とうれはんにくしよ
ひとかいちりやきし白氏が風流をまなばれけれは竹もいろか
硯なるらん王氏が道逸なりきとんいふ毛もなとあし
うらしけれは硯おのむかしあはれみて我なきまあよ
こゝろしむへくいやしやて石山人もうらはしとそよ

評云此賦ハ文章ノ通玄ヲ尽シテ始ニハ子西ガ寿夭ヨリ出此ハ萬雪ノ文字ヲ云イ終ハ石山人ノ一字ヲ云イテ全篇ニ硯ノ一字ヲ顕ハサス此等ヲ隠見ノ格ニシテ倭文ニ一体ノ奇絶ト称スヘシ然ルニ壁ノ中ヲモトヽ云ヘル前後ノ通続ヲ弁ヘ(ハキニ)ス但シ源氏ニ玉鬘ノ巻ヲ云ヘルニヤ知ラス去レハ此翁ハ北村氏ニシテ其時ニ名アリ学ノ名ヲ称シテ始ハ洛ノ新玉津嶋ニ住シ後ハ公禄ヲ得テ武城ニ官仕ス歌書ノ秘物モ数多メナリトゾ

既望（イサヨヒ）ノ賦

芭蕉庵

望月の残興なをやまずて今宵も二三子といさなはれて船をかたゝの浦にはせて其日申の時ばかりにのあたりなんなるか成秀といふ人のかふのねに漕寄て酔翁狂客の月にうかれて来れるありと船の中よりよばはしよふあるじをよびまゐらせてろよよろこびて簾をまきちりをはらふ又此の園に

草ありけきありて野翁の仲月さしてやまず　或說
やまて岸上に樓をかまへて遠とのく雲をはらし　いさ宵
の哀を得て月をまつ川なれどもふくはしからて湖上
にふやうに照りそれり薄てささぬ仲秋の月に
月のほのかにさしまたゆしもとて鏡山にしふたつろよし
今宵月をみのあらし遠かりしとかの堂上の欄干に
よれりし上水壺をたたえてそれぞれなのめに十二降
のきれとひとてとかくうつふわたし月に三竿みして
是迄のうちかくれをれいつまで鏡山とてうすうを
てらさてはれてあるし比奥とかへてわりくさのかげ

ここにし客ともてなぐさめ信じいって仰がりやそこに比良
の雲をてらぶしてさし水面に玉塔の光とくさくおほて
あしさよふ孤帆の影とみるに漁火のかげと
と笛の声にうけてかすかなく月のあけしにのてかなたと
かはれる三つの歎息の詞なりを錦そてまひしも
けぶにあそびて二またに憲ん偽経の衣さるわせ
せ常緑の波なほしてやはらふにあまし奥に染し
て来れり客となし併奥はにあてぬさむや浮の
岸上に不色をあくれば月を横川にかくふふて哉蘊
峰の鐘もやゆるなるべし

狂云此賦ハ誠ニ瀏亮ニシテ全ク賦ノ体ヲ尽セリトスヘシ云々ハ
鏡山ノ一節ヨリ古意ニハ月ノ雲ヲ寄セテ此一首ハ夜ノ章
主張ヲ云イ古詩ニハ玉塔ノ喩ヘヲ借テ千躰仏ノ光ヲ添ヘ
或モ故事古語ノ用イ所ハ此筆ノ橋抹ニ知ルヘキナリ本ヨリ
先翁ノ文章ハ獅子庵ノ遺稿ニモ数多ナレバ或ハ湖東
ノ文選ニ入リ或ハ門下ノ俳文集ニ出テ今ヤ再選スルニ
及ハス譬ヘ百篇ヲ見尽ストモ此一篇ノ趣意ヲ見テ此一篇
ノ虚実ヲ知ラハ和文ノ道ニモ文ニ明カニ俳諧ノ頓挫モ
文ニ明ナランヤ云ルハ其門ノ詞ニスカリテ歓楽ノ中ノ哀情
ヲモ忘レサルハ例ニ樂ニシテ淫セストヤ斯云羽ニ於テ斯文アラン

涼賦　　渡吾仲

洛陽の東は川ありて上とかも川とい下とまた川
といへる名々ちりて其の石川や瀬の小川とも名に流に
されは年ことの六月七日より十八日の夜もすから
の橋のこなたより五条の橋をかきりとして此の川
の夕涼をなして一樽をさけ誰の樽をかはしての夜と
むしろのむしろまて着物の色をきそふもいとして夏月
ともしひをかゝけるさては咄の風流をあつめて
なよ竹るかうちりん況やうた人の錦繍をかさら

跡ゐるのむかしは風にまかせんかたを一すぢ八坂のたうへあるは又
はて東西の岸にのぞみてみのふくの桃灯ともし
そのうち篝しのゝめをまつやらんわれは帰てあるは
れ露にうるほふのそなたもやさと一所の新にほふ人
扇にそう〳〵此折ふしに風も柳の緑しかるべかりの
やどりの雨はしまりしにその色にそめたる所もちら
やうの松と深られて春宵の舟や祇園のあるは
まして万燈のひかりに白日をあざむいて沈香火底の
笑語をも吐かつ風しきありしの音もあらたなる
いかなる北面はたまたまの錦繍のあやをかさねし

西に祢宜ろとも見へし所てくの河原わたりより
餅あり酒あり花ありてあり桜(ヤヘヤマ)城の娘たち
かくしこ子坂の北處にあるはひとり石花菜(トコロテン)の油に
ものくして八十杯の我にこゝろなきもあるは米か
比叡人の菜をとしれは味も芸那の名倉をとは
辻談義の放下師なりの音をあらそふ女中とあらし
またはら流人とをそへてとりしむあるに水裏(サケ)投よ
猿猴の手をのそりしあるに滅多的に王餘(カレイ)の月を
ぬさく辻に軍談の声とはへ橋に乞食の所に五年と
さくいの歌かるくらの地獄極楽も我に一練に善悪と

見されハ一刻千金のあたひの宇文中に至つて猶ハいふをゝ
むかし名水のおもしきをもて儒文作の眼をきらくん
名利の閑をしらと思さらやも尾の所にひくとさまれ
さるや作れと孔子の云る中の者ともかつて御遊を
あくりむ在原の作ても世にしられ末は郎の
おもらく者のやうもてはかくをしられあたらぬへし

往云世踊ハ縦擒無碍ニシテ始ハ王城ノ万代ヲ祝シ中ニハ
帝京ノ花美ヲ題シテ終リニ遊人ノ哀楽ヲ云ヘル誠ニ長安ノ
名利ヲ観シテ然モ長安ノ名利ニ遊ヘリ或ハ四時風景
ニ和云ノ文法ヲ交ヘタル或ハ家名ノ挑灯ニ浮世ニ草紙ノ
筆格ヲ用イタル或ハ河名ナト云ハ物ニ長短ノ對ノ題体ヲ尽
セル總テハ俳諧ノ筆格ヨリ新古ノ風ヲ成セリト云ヘシ
況ヤ儒仏ノ高論ヲ挙ケテ其ハレカ結語ノ軽忽ナル言ニ
文章ノ虚無ヲ傳ヘテ洛陽ニ無作者アリト称スヘシ但シ
世郎ハ渡部氏ニシテ別号ヲ柳後園ト云フ嘗キ人ハ標号ナリトリ

将棊賦

東花坊

象戯と云ふ盤のあらそひを表して若たるかねもまた
とふなれ張陣の法ありて盤上に智恵をたて
かつしむ国の王の仁あるへからす忠臣の義なかるへん

や勝負ハ時の運によるといへども上手と下手との沙汰
なきにしもあらず馬駒の法とさハ左からひだりかどひ
陽本斥(ヤンシキ)擢(ヤクラ)として金銀桂香と八よにわけて飛車
と角行とハ軍師の位なり一しむけしを漢の張良
あり蜀に孔明あるがごとき諸軍をさとして其の
下知にまかせしむるものなりされバ銀将以下の
諸卒にいたりて敵の城中に攻入る時ハ立に一段と
なりて金将の位となるぞと将棊の勧賞とす
なり此故に歩兵ハ楯(タテ)の羽となりてまさにせまく
諸将をまもりの役に敵陣と旗本にて飛車いかく香車

とはいひ角行をもつて桂馬とはいふ此二騎を縦に調練
にあてて其の籏下の勇士と定め一しゆして飛車を
居て飛車あり又両飛車あり中に飛車ハ古法の軍
立なれバ中央に録角の手とつけてすゝむ二方に
一兵の称あり兵書にハ変に逸労の法ありてすすみ
なくハ此の歩と作けつにそれ或ハ中ハ殺に飛車
のあり時にしつ歩兵それ生れしひらと又之ハ軍此
血染にも損まり両にあたれと蹶ぎるにやもまれハ銀
桂にもとはいくられて伸んとするに度とこなを
られとまとねの左輔と定めて敵ハ楯の羽とおして

若一ハ味方ハ大将と討さうし馬の足立のちろかたら
不意の敗軍ゑ及ぶかすありけりとやよ鍋のうらハ龍
飛の本とよてさまさせと召つ兵書の誠も言ふ通
行たあれ敵城に乗入て王のかさりとえるむ时そらハ
かゝらえり桂馬とえれちきりへきり銀とけ搦ゑちら
金とうちと指て桂香の陣ゑ責よせれハ鉄城岩壁
も为をそくみいと為かくそえと龍王の一手は押とつひて
飛車の本の軍術ゑつされし本の子此香車見捨
吉て彼ちさまのにへ行し通されてあたへ為ふ命と失ふ
なれも仕たる死ぬ将の色ゑやうにひて小冠者ゑ事味有

それよりきりみん以ハ角さうつたふハ成歩歌歩ふみて
其よ小敵をとつてハあるとし行ののいひや行ハ角行ハ
桂の陣によひ入て王の金の勝と窮ふ又いられの時より
うたるとそる馬飛ハ香車をよ又あとかくしおかく
ハ金銀ときハ飛車の本ともに命をかりたる死ね
の勇気とやうふちかの沖達の途ふおそれ川へ
或ハ飛龍王に桂馬とやかれかの搦ゑよりおち
時は敵そそるをと行くすまんと王将の行ちちへのあと
行あす銀とあら桂をとらねハとのつらし　鶴翠堂の
道角をゆてちひもらしるゑ王ゑ飛車をとかきて

如此の勝とゆるすハ全く角の方の秘法にして
子死とちて一もよまふへしてくしたり軍のあつかひ
にて勝ニ弁ずるあやまちなからとも其陀を中三軍の
口蹊も王子なお軍にかれて角行に誰ひすれハ
角池の手余陣の心くみんりし連者乳謡の是論
にわふひろるハかかる陣中の風派にして漢楚之の戦ひ
ふさきられしハいひうそあるは陣中におこの花ひく
ていうく角行とよへるの心法に知らんハ行そくの軍師
にきわをとけしやくにやそて官名のけハ龍馬ゆ
ふのりて也方八面に威風をゆるへもも人のおそれと

角にはく角行のしいうるもすゝめなしけて金将ハ
王将と共にありて常に其のかたハらに仕りて諸卒
の賞罰をはかりとりのやすまく飛角が下を
かたむるあれハ銀将の手あてハ陣をはくゆれとも
かなり官をうく禄みちきれハこらへ弛討の勝負
とろやまて猿なる銀桂の下知をなしてやれしと
いふらくにおちやくハ桂馬歩の手きをやつれがくる
に一寸もあけすあてうて或ハ桂馬ニおひられて中段に
もしひわるに弁に皆の馬もそえられるけハかちこもの
歩ささえるあつかれてもなしに敵の手ほよりつくるに常く

よのつねの草鞋にわらぢてその身わすれなきなれども
まさる銀将を歩兵とよくにかひて常に先陣の外
とかく歩兵にあつかはれ侍大将とて一しほは如しおもに
飛車にちかうとおそて敵をねらまに押かくして香車
ての末にもとゝやみもとして歩兵ほなるしむし朝夷なる
首引には濡王四郎(ミツノヤ)が鞆(ヒユロ)には竹尾の法さへ及ざらん
法そこそ金銀車に小腹をとつてきわめとちかひと
とれてへつらはれが狸むそれ名ぞなきとしてふかまがし
法るを韓信がそれとくらべて大将の名をあらそ
ふるにあつかはんやそと信まで足駄(アシダ)の法といひけ

銀将はふの軍略なれば彼の囊砂のちからよくかなはじ
のうつはる儀あるべしされど敵王にむかひ金をうたせ
かくさとりへきるに敵をその腹をとつて王手はわき
ざれば兵一所にあつまりて金将一枚をも及ばざれば
飛車角の鷹狩のひくくれてふ今はおとこのちからと
に似れとまうし金将の将を悲しけれはとみる一番
といはれるまうへし實に桂馬こそおかしき者なれ
をしむはかれ物の雁より飛びて危にみちて去りがたく
まあたりをうつは猪(ちよ)の勇気に似て臭のきらはれ
ねにおかしいへらし張儀楚秦がやうなる辯舌

すて敵国とたゝかひのいきを察して不意を討んと
すれバ仁智の法をさだめて其すゝみに
とらふれバ仁也ある時ハ玉将の大軍に高塀を離れ
さし出すると脇将をひそみ歩兵を添へてしやおす
仕か勇を思ふぬらをそれいそぐし左右をおし
ありしは悔をあるまじくありそを桂馬のあれ
といひて世智にかしこく香も仕れと桂馬の
諸とひひえて桂馬のそれ諸とふハ仕か歩の真の
ようして敵の仕切と金銀へいそぐ飛車の軍を
みそるゝあり香車を角行の小姓とあるゝ

ませられておきいたりてあそびける家の軍に一手に様して
其の両月をすべらむとするものゝ其ものゝひ一節にあく
くれて素鑓を使うものゝ一陣なるをすゝむると一陣に
きしむ時歩兵の先陣をとらへてひしと金をと
そふられたことをひらへてをへろし桂を
いはゞ悔をあるまじのてあるもあへしかくて両陣
両王に封じて始をとけの一手よりさしてむかふ先
あれば是らのくゝもえあらて中にそ二手三手に
遠をあらそひ勝を一手に遠に勝負を決めて皆
先進先退の兵法にして上手とうたへれやう

又下はしら何の用かあるとて許せる事を取合のかねと
きりて命を捨ると捨さるとの機の損ねをあはれ
忘れて居るもはなきにもあらねのみならすと認へくして
諸葛か八陣圖をもりて神機妙策の謀を
めくらし宗桂の家には将棊經をつくりて善戰擒
将の法をあらはして畢竟は油断大敵のいましめ
儒卿も是を説ひろめて四書の右にもかかり
八十一目の将棊ともなれは孔子も是を博奕といはしそ
象戯ではとしてもまさる語や況や盤上のあそひ
とんてんの勝負をもえらるへしたのむんは利

鈍ともいへるなれはよく何にその身の是非をとえらひて
人は對盤の法をまもるへきにや

讀将棊賦

村野航

将棊に一軸の巻物あり開れは一万里の天にひろかり
て龍王の髭鬚にもおよひ捲れは一尺の盤上におさまりて
神馬の轡に風かくし諸に縦横自在なり将に號令
物しれる実をこすの夫と卸して和漢の情を
ほくさるもこれを荘子か蝸角の争ひ蝸牛の角に国を
あらそひてかくされ敵とみかたとあるらう大将の

劉項には孫呉の軍とかはり軍師の仁勇には章邯の
詔(ミコトノリ)をとらせてさるは韓国のあらそひならしもかなはせて下
て上となし、ろよ虎車の歩をとゞめて中段にもたれはあれや
またる楯の左輔にして前は角力のひくきの山路にて
やらて漢楚の風流を張良が議(ウタ)ふる一しきに次に金将銀将
と関羽張飛が異見もあらまて武綱は平が力味もあく
まて金は宋盛の臆病とおもへは雑兵のまに栄耀の
むりなり銀は韓信が勇気とさとれは諸卒の頭
に武衛の名をとゞめてこれらも官禄にたかふやうなく
の今もむかしの人これはいやしめさるやにて桂香は不孫

ならんとは桂馬を張楚が辨ありて塀と越ゆれは飛駒はきたら
さらと軍をすゝめは林梁が飛跡の名言ならん或は逸遊労飛
地は先をもて以逸(イツヲモテ)待労(ロウヲマツ)ことは兵書なる人の退屈ぞさ
まお方家の戯言(タハコト)にかゝりなしくて或は前川の容軍なる
と長砂の二子に文章をあつめたる或は孫とあらて
為のたゝとかうる人とあさむかて奥の法をほこられ
うらさを念てそ今これ世情と写して儒門の四書を
まよみなり御家の八教と指よなれてぞ術は将棋子は
比喩ありて和漢の情をくまてつくしあつんはて盤上の
あらそひとふんて人これを姥とも云ふることさらに堯帝に如

又それとなしへれよんだ世の人又えへとをりしなけしも金敝
又刻腱の人を勝川又出すと訊ハされハやうして前なすは
服這の旋(さやう)たて頁ろ又念佛とやはらんやはさしね集
まん冷泉とふくはめね葉をとしるはきはまとはしふ
なまて世をいつさ歩こ五つのけしやまり名人號の暁かて
駒又やすねの情とおみれハ御又五子巻の理をはなく
とろ遠く大般若の甚深ときつれんとり近く小将棊
の仕跡とすむ而し
往云此ハ扁ハ前號ノ謹ナヤラ委ク故ニ古語ヲ解スルニ
文ニハ句對アリ意對アリテ與ル躰ヲ膚成セリ謙ニ

應用自在ト云ハしき八ハ荊公カ傳類ヨリ受ニモ請ハノ一子
ヲ顕セり然レハ此篇ノ趣ハ始ニ巻已節ノ二字ヲ以テ和漢ニ
万般ノ情ヲ喩ヘ儒仏ニ一貫ノ理ヲ鑿ルニ或ハ雲ヲ起リ風
軽レトハ孟父カ臥竜ノ埜ヲ携レ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ採レリ
或ハ保元章武トハ和ニ信頼ノ敗軍ヲ云イ漢ニ孔明カ出
師ヲ云ヘル但シ先帝崩御ノ年号ナラン或ハ関羽ノ一對ニ六
和漢ニ智勇ノ兩士ヲ云イナセヲ四百見トカ味トハ互見ノ法
ニシテむモ影畧ヲ二兼タルナリ婚レテ宗成四ニ韓信トハ
金銀ノ情ヲ青尽レテ文章ノ風情ハ言ニ知ルヘし或ハ無孔
ノ一對ニ具レヲ 敎ヘトハ其名ヲ云イテ是ヲ騎(ヤウ)トハ将棊ヲ云

ルもモ隠見ノ法ナカラ甚是ノ二子ニ云イカナヘテ此等ハ奇
絶ト称スヘシ然ルニ結語ノ大般若ハ大将基中将基ト云フ
ヨリ摩訶大ノ二字ニ帰着シトルル此等ハ当意即妙トモ云
ハン但シ野航ハ加々美氏ナルカ別姓ハ村瀬ニシテ濃ノ山縣ニ
住ス蓮二房ト號ス者ナリ

日和山賦　　山岸昨良

湊よりは和山とよふ名をも序して風雨の変をしる眼界
てらゝかなれはとも是此津の日和山はおほよそ田川と
帯とし猶五万田を襟として蒼海を例のはらし

まはありて白雲百里の遠をしるしれは鳥海山のかさら
ありて海にあらそて一海にあたらふ一林麻を松の木陰
より市店の白壁にはりてあつて南を金風寺氏角静
の殿石をひらし北を月窓寺に入道の鏡をとこく西浦
の茶師も漁舎の観音も多くの様かたを見るあつて
松杉に南の行もさひやら一殿や末北に此宇ちく
雲南に海てらゝある白根の雪を一相におもしろく新羅
の月に千里を思ひむ年そ眼界のおもふ承ろし
むら承花清ハ此にあそひて鵯の日和をうへくさ
たのちに涼荒もまたま春をおもて鵙の松風と秋の色を

近くは此所にかくり居とよき浪人山を風雅の人をすゝめて
此所ある時は入相の夕日にかゝやきあるひは千とせの
鳥の風に流れよ山岩に凱唱のこゑはあまた濱に兼帆の
倭とかはされかはしのり詩のおもしろきはおほそめしこゝろ
の月のころもおかし安治の海膽も摂浦の菜鯉も
長門の蟹は上戸の肴ともてはやし島屋の鮭は下之關
のにぎはひ次に作て滝頂寺の松原は昔の軍の名にかをり
加えて安治の雑天ら今の世の福をあたふ稲荷の社
稲荷の作らる雄鴻は神のこゝろを祝ひて船に積より
は秋雲の日和とつゞく空にうつろふ松鴻の風おさまる

さるにして市倉の浦し網に夕陽を見おくれば室濱の
娼は須二の浦まで仙かよひて風さかりに吹ゆく一つ次
されど此津の遊女とも此胡蝶の舌をならべ男藤の
笛に和して歌うたひ世にあそびたまふ都の人と今ん
かくりて佗起姫が酒と恋のひ入ふかれの客を待とりて
言通姫の古にならんきさむ詫恋しんけふまで殊にある西
の情あらんことはりをきくなく疎となく元よりてあり
あるは江の女うし此嘆息をとられて猪も毛鎮の
遊宴をなくと扇に菜鶏の風情を写せて戻しく
三番の池となそろひて世々の風をもそれぞれの人を

いとしつかなるあらんはれと船ひのちからとみて言ふ風雨
の表現とえらひまに秋の月和をはくむへくは天地を
人の和よきうたとみるべき賢の詞もいろいろさまやと
言ふは和らの賦にてふく世の人をはくむるへし

狂云廿篇ハ全ク賦体ニシテ文法殊ニ遙遠ナリ始ハ王勃カ帯襟
ノ二子ヨリ金鳳月窓ノ閑寂ナル白狠ニ新羅ノ一對ハ筆下ニ
天地ヲ縮ムト云ヘシ或ハ山海ノ名物ヲ賦シテ上戸ニ下戸ニ朧ハ今格
ノ自在ニシテ捉トリニ哥ヨミハ文法ノ風流ナラン或ハ遊女ノ一段
ニ胡蝶ニ胃痛ハ奇妙ニメ佐保姫ニ衣通姫ハ時ヲ得タリト称
スヘシ然ルニ朝雲暮雨ノ四子ハ宋玉カ賦ノ神女ヲ借テ雲雨
ハ山ノ寄セナルヲ長恨哥ノ情ニ子ヲ合セタル誠ニ博達自在ト
云ヘシ去ルヲ江ノ吹キ詩ノ嘆息ニ寄セテ文ニ一篇ノ骨節ト
成セル本朝文粋ノ二序ノ類ニ見合スヘシ總テ廿賦ノ趣ハ山ハ風雅
ノ人ヲ待ツト云ヨリ北山ノ移文ノ山霊ニ寄セテ北山ノ風雲モ恭ク懐ヲ
ト云ヘル鐘山ノ英霊モ巫山ノ神女モ共ニ文章ノ起結ニシテ
一篇ノ首尾ヲ見ルヘシ但シ作者ハ越ノ国ニ住ス山岸名氏ノ風土ナラ

悠然賦

鑑乙子

雪のおりしろふゆりてやゝ睦さるは世君庵にあつから
て御のあはらふよあり菜よことしとしよ悦人あれて

酒をのむとて舟まであらん事はありし其人とあはれがりて
眺めつゝ悠然てふのこゝろは此ふんにて南山をながめんや
其の事は外のものをあつかふにも其の外は人のまなこをまよ
ふところやうなり此心は此もとをあやうしんや此君そこの外
とひとつの人とつなかりし其千葉を人とよみてする
あさらそて酒を人とはなまてるあさくさてはなれて庵の
ときけれといあるものゝはちらひてかくる悠然の此に
も家ねはなえを酒ありて菊あれんて秋にも此事に
あはれはれんといふて事此ありし其人とあはれなして
咏じつゝ悠然くらのこと

評曰此賦ハ累語格ニシテ然モ文賦ノ瀏亮ヲ尽セリ是ハ元ノ圖
ノ悠然ヨリ或ハ六子ノ酒茶ヲ用イ或ハ八子ノ其跡ヲ用テ總テ
其詞ヲ累(カサヌ)ルニ子モ其用ヲ妨(サマタ)ケス此等ハ淫文ノ尽サル
所ニソ皇ニ和文ノ風格ヲ知ルベシ但シ此君庵ハ賀茂ノ金城ニ在リ
テ駒方子ノ別荘ナリ此モ水竹ノ幽居ニテ悠然ニ其名ヲ譲ル子
トハ御ニ釣師ノ隠号ナカラ某ニ荘子ヲ読メル時ノ門題トソ

好色賦

無好法師

つれ〳〵いとしく色この中ほかんかのことをいひしらく
あくまの色のはとるよこそしられまゝよあなたも

きかれてはなやかにまじらひありき 親のいさめ世の
そしりをもはゞからずむかしの人はまふくあつまるさま
おひこれまるを女の寐ぬらむよやよろこびむかふるさま
これおぼしきれざりてひとまちえずがれるかなく
つらくあらて女ぞなやましく次之かれんことあるまじ
うるまふことはなれ

釈云所篇ハ世ニ知レル徒然草ノ三段同ナリ然ルヲ宋玉カ賦
ニ效イテ今ノ三字ヲ題スルニ其趣ハ異ナレトモ其意思ハ同キ
ナリ尤モ所段ハ甚書ノ関門ニテ古今ノ称首モ爰ニモ類
ハ倒スニ云ル八字ハ文者ノ習ヒニテ色ハ好ムニシキ経書ニ云ヘル所

色ヲ好ムハ其道理ヲ知ラス増シテ好色ヲ解セスヤト徒然ノ譏
ニモ所論アリ誠ヤ好色ヲ擇フ子トスルハ聖言ハ之千ノ宮女ヲ
擇ルトモ姿モ情モ世ニ勝レ一生添ヘトモ飽ストニフ天下無
双ノ美人ハナキ故ニ兼好ハ独寝ノ二字ヲ求メテ其意見ハ
無妻ノ道理ヲ云ヘリ然故ニ登徒大夫ハ齞唇ノ妻ヲ愛メ
五人ノ子ヲ産ミ宋玉ハ攣輸ノ婦ヲ擇ミテ独寝ノ男ナルニ
兼好ノ云ヘル好色ハ宋玉カ云ヘル好色ニテ其趣ハ異ナレトモ
其意ハ同シト註セルナリ疑モナク兼好ハ文選ニ所賦ヲ写セル
ナラン誠ニ所段ノ其意見ヲ知ラハ二百余段ノ才ニ置ケル此徒然
ノ其意思モ明カニ兼好ノ一生モ明カニ儒仏ノ所教モ明ナルヘシ

行類

氷波行　孟亭

山岸畔有襄

三国の北一里ばかり大湊山の麓に海曲あり此所を
東尋坊とて世に伝ふ此は所は天正の比のくそて
寺の平泉寺に衆徒なりし其性甚だ暴悪
にて其の師をあやむ衆その徒とかたらひて常に海辺を
業とせりは師等ひとしくたへてそれをとらへてこれを
ころさむとするはかるに日寺の前に酒宴にいざなひ
たけなはなるに及びて彼は岸より突落しけるを
されば彼が怨魂に此海曲をさわがして千々の卯月

五月には風あらく波立て西は小濱のかたにいかりを下ろし堺
の舟をいひて海に家とも見ゆる諸に此渕は數百
年をへて東尋の井まとと呼くさくと山石荒き曲々に
うつりて神ちるは師の酷き人ころもその後ち
此の渕あれかふかし和尚の頭を得たりて此渕を
みるは浪にかりて風波のいそ山やうにみゆると
さらに詩客の風流もありて禅宗の風雅にあそふ
人もしやと此一篇に活所をあらしむ
むかし僧あり爰に来りて　卯月のはしめにひとくりかへらん
一念の風たいかにもり吹て　爰にみる花や波やかへらん

錦のはしのはなやかくれて　鈴の音はいくよはなさゝん
綱をは音はけもなくみちぬ　蟹のはなる人ととろかん
水をやまゝへは水を波あれて　波とはなれはれともふらん
今うれしき胸のやすくれて　山ちりくれ次は川ちりけりん
紀云此行ハ十二句ニシテ詩ニ云韻一偏ノ格ナカラ總テウクスウノ一韻ニ六句ノテノ字ヨリ六句ノムく字ヲ用ユ倭ニハ一韻一句ノ格ト云ヘテ倭文ニ体ノ鑑ナラン況ヤ此行ノ俳諧ニシテ。印花ノ雲ニ咲鳥ノ古音ヲ嘉セ倭ニ文章ヲ観タル本ヨリ富饒ノ名ヲ以テノ怨魂ノ字ヲ云ヘルヲヤ然レハ此行ハ水波ノ二字ニ迷故ヲ故ノ障アレハ倭ニ此行ノ名トハナセリ誠ニ禅門ノ語脈アリテ這ケノ体ノ節ヲ轉部セリト云ヘシ

万歳行　五七言

華表人

「同音節」様君は五万歳をよはひはなさまよとる尾のゝしあし虫の大和なる君も治まりて国まりし四方もふみれはみは末をよ風よなひおてきちなひろせをあふ坂をとはしねいそやむいやの関をうれなし。神楽をも千万歳さゝやいしられをなかちて「様君詞」壽よねくろ「太夫詞」翁よ思ひ「同五日の節」末遠めけとよるのことむりの春はあまいありおひつりのめなくまへて「様君詞」神楽もさての外をはいて「同音節」万歳楽の脈はしこ中比

にハ「俵君詞」あらちハ。「同音節」柄もかりも以てなや。あゆくりおろろ見ら
れを可ならるとてやされて。今の京ちをきてかゝに△
菓柄く こきくきら△「大夫詞」柄よ風俗「俵君詞」餅よ砂糖「同音節」ありかゝく
らきるはゞめりまい△家よ錦おを杖よたる○子歳永よ令
と極よ○「同音詞」君んまるや「俵君詞」無ほよて「大夫詞」若をまいつれ「同音節」をとておね○
ほてよゝ年のはゞいめ△豆よよれこよ柄からくら△「俵君詞」ねふらし
「大夫詞」どれもひらふつり「同音節」氏のかりよれやらせよおし△

往云此行ハ全篇ハ五章ニテ章毎ニ八句ナルヲ八句ニ之約アル古文ハ前ハ
むモ四句ニ韻ニテ後ノ四句ニハ一韻アリ例ニ首尾ノ韻法ニノ本ヨリ
換韻ノ一体ナリ去ルヲ才七五章ニハ九句アレ尾君不覚上ハ楽府ノ

常語ニシテ奇行ノ類ノ発語ナレハ和文ノ韻法ニモ五文字ヲ
除クニテ知ルヘシむモ才三五章ニモ語路ノ拍子ノ違イ
タルハ杜甫カ兵車行ナトモ白カ襄陽ノ歌ニモ此長短ノ
句拍子アリテ是ヲ唐声ノ曲節ト云ヘリ此故ニ此行ニモ短語
ノ無声ヲ詞トナセリ然レハ此行ニシテワキ在リテ節ト詞トノ差別
アル文ニ急緩ノ拍子ヲ知レトナリ但シ柄ニ凡凡ヨリ君ヲ見スヤト
云フアヌリハ両人左右ニ向キ合セテ此曲ヲ万歳ノ大古ヌト云ヘリ
むモ親ト親トヲ見合スル時ノ形容ナラン總テハ漢文ノ含語ニ效ヒテ
江戸万歳ト云イ法所万歳ト云ヘル此等ハ小鳥万歳ト云ハン
或ハ尾崎尾ノ詞ヨリ永ノ一字ヲ云イ含メテ大和ニ君カ八千代ヲ

祝シ或ハ鴫ニ照ノ字ハ照鴫ノ倒時ナリ或ハ逢坂ニ鸎鳥ハ鶏ノ
盧音ヲ含セテウヤムヤノ関ハ臺字ノ縁ナリ或ハ桯鳥ニハ
西行ノ哥ヲ借リ韋袍ニハ東坡カ詩ヲ寓セテ例ニ和漢ノ通用
ナリ去レハ東坡カ布穀ノ詩ニ勧我脱布袴トハ是鳥ノ鳴音
ナレハ是ニハ韋袍トイヒ出タルナリ或ハ三章ノ名ヲ云ヘルハ御所
万歳ノ詞ニシテ雅楽曲トハ酒ノ名ナリ然レハ聖俞カ四禽内語ニ
提壺蘆沽美酒ト啼ク鳥ハ日本ニ称ス類ナラン啼トニハ
和哥ノ詞ニ寓セテ鳥ノ俗語ヲ願ウタル是ニ文章ノ虚実ヲ
見ルヘシ或ハ団扇ニ柄トツケ百千鳥ハ囃物ノ拍子ニテ浜千鳥
ノ鞁カクナリ総テ万歳ノ詞ニハ千ルトソメルトノ二用ナラン或ハ京ニ

タイラアトハ平安城ノ色字ヲ云イテ蕭桐ハ当時ノ法経ルヲ示ノ
童部ノ早言ニ叙イテ是ニモ目出度ヲ云ヘルナリ或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ
平ノ二字ニハ洛陽ヲ祝シ松ノ二字ニハ武城ヲ祝シテ尤モ千歳ノ今
カケナリ或ハ千代平ノ法祝トハ諸ノ万歳ノ俗語ニシテヤラタノシトハ繁栄
牧メヌルヲ今ハ五帝ノ法制ニ寓セテ家々ノ庭竈ヲ祝イタル誠ニ
同出年万歳行ナルヘシ但シ華表人ハ我所ノ隠名ナキヲ文法ノ奇怪
ヲ憚テ是ニハ丁雲カ鳥ヲ云ヘルナラン

吟類

雨おと吟　　佐芦文

むしもよう見いかれをとしれて　四てふる神をみてもそ花まてらし。

夜もまたかの枕うくふすまは　枕にはありまこ夜もなかりし。
妹を抱えてしも食あはね　世とて嫁ぎの色をうもあさて△
衣食ねむりへあらぬまゝとて　人とうやむんなうん△
清いや魂ものがたりてうらまき　乱おふるあまり涙淋を治と。
伊勢のふうる閑流おうもえ　忘れてうらみ浮世うらしと。
春ぞ春西のおとしうらは　涙りて神の袖かすむ△
むすめ妹を空ひなとらけ　梦はあそぶ人いうてん日とうる△
涙しやのむかしうりきくにて　やよ涙られのある涙るみ。
ましてや夏のありくしたに　桶もそうるもそりあへ居をむ。
秋は秋とて雁しの空に　泣れるあしねうれはみればさ△

鉢は其こそ人やこそうらむ　雪の中ふての枕らなに泣二し
隔れは時雨のいくとおしねは　雪へ世蒔籠とんまうれし。
深さは跡のさしまうれは　枕らうまつれなりうえあそえん。
ふるやひつれ世を枕てきく　樹下石上を詩によくうむ△
おしてうとせとれの本意よ　つゐうたりとみぬれるてやある△
鉢を月花もよそと云ふ図に　一様り起りし不破の関あり。
云ふはるるともてありかしらん　むすむのおれ涙そおみたる。
評云此時ハ九言章十八韵ニシテ章毎ニ四句換韵ナリ是ハ杜陵カ
破屋ノ音ヨリ哀傷住ノ云中ニ住居ニ四季ノ銀雖ヲ云ヘリ
然レハ春秋ノ二字ヲ以テ夏冬ノ二ヲ互照セんなと四字ニ四体

ヲ分ケテ春秋ノ詞ヲ塁ヌル此等ハ隔句ノ意対ニシテ実ニ此篇ノ音
法ヲ称スベシ但シ茅屋ニ雪ヲ読メル古人ノ謹吟ヲ学ブベシ誠ニ
吟ノ一体ハ蛩ノ声ニ喩ヘテ自己ノ沈思ヲ云ナレバ杜陵ハ我子ノ愛
惜シキヲ歎キ苦シ天ハ我子ノ行末ヲ思ヘル関守ハ起臥ノ吟ヲ又
喩ナルベシ然ルニ不破ノ月ヲ以テ関ノ一字ヲ奇ナセル結語ハ題名
ノ後ニ字キヤラ沈吟ノ情ヲ実ニ尽シテ烏玉ノ二字ノ無用ヲ知ラン
二八但シ作者ハ佐野氏ニシテ美濃ノ関ニ逍遥ス蓮乃ノ名尭ナリ

曲類

狂曲ブリ　二章

作者不知

よしやとく宵からつらくいかにもれこそはちぎる
…る月なと
雲のとやてのあさちのゆし　かやうあたりの
つりのかし

狂曲二章ハ古キ唱言ナカラ今曲ノ文鑑ニ出セルモノナリ
前章ハ古今雅集ノ實アリテ月ヲ白コフハ是章ノ花ナルニ後章ハ
新古今ノ花ノミナレド漢六牧牧カ詩情アリテ雪数ト思ヒヤリ
又ルハ此一章ノ安言所ニシテ茅店ノ鶏ノ霜ノ覚ナランカ

田舎曲ブリ

作者不知

市立ちしらぬ身ぬかりを帰のまろあなき

ゑふこゝろは杵とりてうたふし
こしみちのあらめんやしとあやうちしきこひよ
うられ何世の子まてとて

紀云此二章ハ能登ノ國曲(クニブリ)ニテ總テ之越路ノ俗ニ諷謠ス漢ニ
下里巴人ノ類ナラン然レハ樂府ノ古風ニ似テ字ニ粋ノ風情
ヲ添ヘ赤裸(アカハダカ)ニ写シ集ルヽナト俚語ノ中ノ風雅ニテ所見ニ文アリ
トモ云ヘキナリ然ラハ都曲ハ畫云ノ法ニシテ田舎曲ハ頓挫ノ
格ナラン李白カ三五七言ナト等ニ七五ノ拍子ヲ知ルヘシ

東曲(アヅマブリ)

生卿坊

かゝやきひやさざしかゝりもきよふよ爲ぬの二俵かし
ちんぞろよ

紀云此曲ハ奥ノ田植哥ニシテヘフトハ配符ヲ云イチンハカトハ不浮ヲ云ル總テ
笠蹤皮ノ米耀ハ免モアレ二俵ノ年貢カ氣毒トナリ但シ生ハ
東国ノ風頭ニテ此類ノ樂府ヲ謡ヘリト徒然(ツレヅレ)ノ爲雜抄ニ此古文アリ

羈子曲

東也坊

そらちれの紀のんそて子をまてぬくゝぬの山の山猿も
人よかゝれてわ袖そそ郷へかへりぬそあしまよと闇の
和泉の川ねこよ捨てうハの花ならよ日和ろかほも笠の隔

やはらかくしたゝかなるひのはかまよりあつまりも小ぶりの袖や
ゑかゝんかまいぬ人とくみれつの猿はよくかゝりつゝも
袖ゆめのうちをきゝつるやせをあらさるれ舞の袖をかくと
かくしてせとをのへし淀も中なや舞子とをまなてまてなる
山まつりよりおこひにおや猿のたまふしさふるとをみてこそけ
桃もものいものかたちてもれもつるはしの西本願寺にゆかまほしるの
色はかへてこせせとあそこき舞のはなれひくしまはつさ
猿りはなつりもやん之山田川とふ河るひものあるつまや
およいなれらの月をまちひてわるとかゝるんのされうとか
君と花猿の音をきゝやわらん

紀云此曲ハ此体ニシテ大全篇五十八句ナリ去ルハ行末(ユクヘ)モナキ日ナ賤ノ者ノ娘ヲ舞子ト云フ者ニヤシナヒ立テ大名公家ノ寵愛ヲ待ツニ如何ニ定ナキ世ノ舞業(ワザ)ナラズヤト漸ク其舞子ノアダナルヲ云フニ似テ実ハ其ノ親ノ情ナク及ハヌ空ノ月ヲ望ムニ多クハ鏡ノ影ニ泣テ果ハアヤシキ尼トモ成ナン去ルハ昔ノ舞子ラサヘニ今ハ都ノ歴々モ舞子ヲ其業ニ仕立ルニ何某ガ娘ハ其ノ師ヲ取リテナナド指御モ花ヤカニ舞テ扇ヲ腰ニサヽセタル京師ノ時世粧(イマヤウ)ヲ嘆息セルナリ去レハ舟コギ日和見ルナド笠キテ秋ニ通行ノ様モ綱手ニ渡リクラニテトハ皆之猿ノ所作ナルヲ舞子ノ芸ニ喩ヘタルナリ或ハ袖ニ世ヲ忍ヘトハ如何ナル貧家ニモ生立帰テ父母ヲ

孝養シ世々ノ窮檣ニ過キヨトナリ或ハ浮世モ聞スヤトハ一ッ三帝ノ平ノ
短語ニシテ君見スヤ君聞スヤノ例ニ古樂府ノ常語ナリ然ルニ
我子ヲタキテハ猿抱子ノ帰ルニ青嶂ノ後ニト云ル古詩ノ意ヲ
聞スヤト舜子ノアドナキヲ諫メシナリ但シ世ヲ忍ヒ以下ハ定ニ
拗子ノ向ヲ拔キテ例ニ変ヘシ曲ト見ルヘシ況ヤ桃李ニ栗柿ヲ
對シテ佳肴ノ名ヒキニ居ランヨリ疏菜ノ安キニ眠ランニハト先賢
ノ詞ヲ取合セテ朝三暮四ノ世ノ様ヲ云ヘル此等ハ和哥ノ文章
ヲ傳ヘテ世ノ栄ニ落ニ教誡ヲ忘レサル誠ニ天地ノ情ヲ動シ誠ニ
鬼神ヲモ泣シムヘシ

本朝文鑑第三

引類
富士ノ引　手習ノ引
謡類
雨乞ノ謡　石搗ノ謡
辞類
風俗辞　山姥ノ辞　艶詞　戯ル佛ニ辞
悼ム捨子ヲ辞　夕暮ノ辞　鳥追ノ辞
箴類
閑居ノ箴　猫恋ノ箴

引類

冨士引　并序　　山部赤人

あめつちのわかれし時ゆ神さびてたかくたふとき駿河なる
ふじのたかねをあまのはらふりさけみれば渡る日の影も
かくろひてる月のひかりもみえず白雲もいゆきはばかり
時じくぞ雪はふりけるかたりつぎいひつぎゆかむ
ふじのたかねは

田子の浦ゆうち出てみれば真白にぞ
ふじのたかねに雪はふりける

按云引ハ諸抄ニ分明ナラス去ヒト詩騒ニ似タル物ヲ序引ト并ヘテ註シタルハ引ハ次シテ詩哥ヲ後ニストス云ル題註ノ字義ノ意ナランカ故ニ詩人玉屑ニモ始末ヲ載ルヲ引ト云テ彼ニハ詩引ト并ヘ註セリ然レハ万葉ノ題名ニモ山部赤人望不尽山ヲ歌一首并短哥トアル時ハ前ヲ体トシ後ヲ用トセリ去レ氏長短ノ違ヒアリトテ同シ哥ヲ二首ツラネテ并ニ歌トハ如何ナラン強テハ長短ノ哥二首トハ云ヘシ実ニハ長哥ヲ引トシテ短哥ヲ後ニナセル時ハ誠ニ本朝ニモ引類アリテ足ヲ古今ノ文鑑トナサハ選者ニ一都ノ眼力アリト称スヘシ況ヤ結文ノ詞ヲ見ルニ云イツキ行ン冨士ノ山ハト次ノ短哥ニ云イカケタル不思議ニ序引ノ両格ヲ兼テ和漢貫合ノ引トモ云ヘシ

撫子引　　斧谷旬

　　　　　　　　　　　　　　東花坊

父といふ名にしあふ瞿麦の二字を名とも字れ風雅の字も
おのこなるしるしの字に植てかの和歌の歌
ふくめりて撫子をは床なつ[illegible]京の[illegible]
[illegible]の露の[illegible]
[illegible]蘭の名をあらはして[illegible]
[illegible]

襖すてて咲かゝる[illegible]

評云此引ハ名ノ説ナカラ語路ニ長短ノ拍子アレハ杜甫桃竹杖

引ニモ似タラン是ヲモ俳文ニ引ノ体ト立ツヘシ然レハ筆ノ上手ヲ
以テ始ハ其人ノ遺名ヲ称シ中比ハ其子ノ教訓ヲ加ヘ終ニハ
祝詞ヲ用イタル誠ニ序詞ノ短篇ニシテ一篇ノ情ヲ尽セリト云
ヘシ増シテ花鳥ニ詣ヲ寄セテ引ニハ文法ノ風流ヨリ童部
ヲモテナスニ虚実アリ或ハ其句ニ襖トハ蘭ニハ藤襖ノ縁
アリテ其人ノ行儀ヲ云ヘルナラン但シ此蘭ハ木汉氏ノ子ニシテ
其比ハ少年ナリトゾ越ノ高田ニ産ス瞿麦ハ父ノ俳名ナリ

謠ノ類

雨乞ノ謡　　　盤珪和尚

[illegible]

むかれうゝろしいうしへちつちなかりしあかりを秋うゝろ

仁云此謡ハ播ナノ人ノ善ク哥傳ヘテ雨乞躍ノ唱歌ナリト云ルハ其比ハ世ノ困窮ニテ此和尚ノ道性ヲ慕ヒテ雨乞ノ奇特ヲ頼ヒタランニ心外無法ノ禅語ヲモ示サス此等ノ俚語ヲ童部ニ教ヘ給ヘル誠ニ狂言綺語ナカラモ仏乗ノ縁ヲ結フヘクハ天モナトヤ納受ナカラン其一ハ本来ノ面目ニシテ其二ハ例ノ不生ナリト其家ノ人ハ按排スヘケレト実ハ躍ノ笠ニ幣附テ遊戯自在ノ法ト見テ深ク信シ高ク仰クヘシ但シ始ニハ播ノ龍門ニ住シ後ニハ天下ニ擅行シテ仏法東漸ノ禅師トハ云ヘリ

石臼謡 并序

坊主仁峰

むかし伏羲神農の御時より[illegible]

世よまむ人の心かゝるもとはあらぬ家の全体なりし又才の人
あるは桂の宮の大夫ならずものゝ名の吟詠ようは心よな今の
世の小夢ならずやして梅さくまれ風雅と云ねよ世をかくかりの
作るあつとは之も句のふるねは心あるく宮のあるには
秋ふけしとて秋月のてはこえりなんよ寄せしめの日と
えらう鶯啭の音も黄鳥あつけ又はくるれの緒は鶸白
られしくなられは又鴇の作くやさとにもかゝるのすぐきて
いさおや作り

右依又句のあらしをそくされ辞もふれなふ
来もぬれかつね色ものはゆわふりきり

紀云此諺ハ一章七句ニシテ或ハ古楽府ノ体トモ云ベシ去レハ其席ハ虚誕ナカラ百世ノ要網ヲ云イナセル文雅ニシテ且ツ可笑シ況ヤ其ハ諺モ俚語ナカラ花ノ一字ニ風雅ヲ添ヘタル此等ヲ和諺ノ文鑑トモ見ルヘシ但シ此篇ノ数ハ加賀ノ金城ニ両度ノ回禄アリテ牧童此技ヲ風雅ヲ残セル其句ハ其世ニ吟行セリトソ或ハ鶏下ノ坊主仁平ハ俳ニ誹師ノ紀名ナリ

辞類

風俗辞　并序　　渡部狂

すのきふらうて深しきはあらきり誹師と誹廷辞とよむに
作をは書まはおなく此一句の二字あれらしむさしとこの語

の音律とさだまりてあるべくハ是れ他ならずして言の音韻
にこそ通ずるなれ漢文の辞ハ類にハ武帝の秋風を始と
しけりて六韻一叶のあつまりの中にも詩賦して騒となり
騒賦して辞となれる騒の賦ハさなりし辞の賦
ハなべてハねばらん師匠の上にあらそひし物とし一字ひ賦
をさるべく情をいふにしへなりし淵雲文卿のあらそひあるん二ツハ
賦してそのうち一格あるハ此に五七の法にあらで叶韻の式も
ならざれどもまくらぶるの風情をこれなハ辞ようやうやう
律なれバあるし漢の帝の秋風も韻ありて其韓を開へ
詞句をも何の格にも限らずしかくもまへと詩ずして楚辞

に似たれハなしかの船人さわりふ辞にのあつかひて楚辞の
辞の字を押つゞけるなくし体をやぶる章の類なきおも
まくの訓解あれども辞類なるにてその形を註して
いつれも字訓の法にて訓し師古ハ説文にも楚辞をとりて
此二字ハ詞なりとしるべき辞を字のうちれ微情をのべたるや
或ハ言句のかならずしもこれを或ハ古文辞式に辞ハ情深して
語縁しく繊の字をさらむへしや文章のかれ手語
とハかへらしく此格のかの風雅をもれとなれんとして此賦
の上はしかなひて辞の字れ訓もあるさ法を和哥の辞
なる土佐日記あるし伊勢物語の詞法つかひてかくして是に書

の謡北にこし雑和言のうやしわこれやはらかにあらん
まちあるにこそよひきつしてらるゝならひにしも詩賦言行のなに
おもしみなしあらんなけれと本朝の詩とてはそりやまる
の辞とてあるらんにちん人の国の註者ともかられは和朝の
文者のまつれとはうちまちりなんちかなの正あらんは
師節に試詞とせり彼へしまてに日本の中言王
も難答辰詞の一格あれは実も風俗辞二章にくりて
これらの風雅なるらんやとしれの言はを詩られて日辞とそ
はへし何も遠く之平者世の詞をきつねて近く
は余遠波の辞とまつらん子さ

傾城の詞

つゝきはりしたこたんゆへひろさく人めきまめきよ
かりもかつうれしうるの後ともあてまんきちのうちへい
うきれはうさしもうまくの金北揮に住ふとね

馬士の詞

坂をてらく荷は麻にくりつ肉の玉むらよ酒をあれ
と弁うきうあれ峰うしにや何のおお川よ
はりそをれてやさしく坊るれる何こししもなし

細云此一篇ハ辭ノ類ノ註解トシルヘシ然ルニ捨ル辭ト云時ハ
楚国ノ人ノ語音ヲ字ニセル辭也其ハ関東ニハベイト云イコンダト
云イ都ニハサンセ氏アンス氏助語ハ国々ノ風俗ナリ去レハ此辭
モ此辭モ句讀ノ長短ヲ調ヘサルハ詩賦ヲ行ハレナラス
亦七韻ノ外ニ此格ヲモ立テ善ク文類ヲ編ラサレトナリ
去レハ須城ノ詞ニハワレモコナレモ彼カ平語ナカラ彼ニヒルト云イカラ
蘭ニカルト云ヘル例ニ風雅ノ忘レサルナリ次ニ馬士ノ詞ニハ銭ヲ異ヘ
名ヲ彼カ風俗ニシテ十文ヲ十筐ト云イニ十ヲ闇ト云ヘル作ノ
一字ハ例ノ風雅ナリ或ハホコレモ遍アイ支文トハサノミナラス又ト
云フ支ヲホツトツメタルハ助語ニノ類ニ一字モ去ル遠慮モ宜ニ知ルヘシ

山姥ノ辭

一休和尚

そもそも山姥は生所もしらす宿もなしたゝ雲水を
たよりにていたらぬ山の奥もなししかれは人間にあらすとて
しへたつる雲の身をかへかりに自性を変化して
一念化生の鬼女となりて目前にきたれとも邪正一如と
みる時は色即是空そのまゝに仏法あれは世法
あり煩悩あれは菩提あり仏あれは衆生あり衆生
あれは山姥もあり柳はみとりはなはくれなゐの色〳〵
さて人間にあそふ事ある時は山賤の樵路にかよふ花の

うけやらむかたに肩となし月をながめしに山をはなれて
墨すりておくる時もあり又ある時は織機のいとをくりたる
窓に入て枕のうへにきてふかくり紡績のおもにとかゝれ
ときくへとさるてくるいさとのし賤の月につんしね思
とやくのこふらん世をとらん餘のかすみ衣をうらやむ宛に
五雲をおそもの月に迎へられうるとさまむ人のきてしま
ふし子あり方あり此媿にあり此まておもひける山姥か
いさ行れや紅にかへりて世かくりによせさ給へとならふ
いあひゆも元年朝か所にうちなよ河よすきしあしのいや
山姥か山めぐりをなすかしき

往云此段ハ世ニ知レル諷ナカラ例ニ我師ノ論ニ任セテ爰ニ辞ノ
一字ヲ加フ去レト而番ノ諷ヲ指シテ辞ノ類ト云ニアラス謡ノ
中ニハ此類アルヘキナラン去レハ山姥ノ一冊ハ一体和尚ノ作トカヤ
世ニ普ク云イ傳ヘテ古今ニ希有ノ文法ナリト誠ニ忽然
念起ヨリ諸法皆空ノ道ヲ示シ魔佛一如ノ理ヲ顕シ
テ柳ハミトリ花ハ紅ト目前ノ境ヲ云イ尽シタルニ色ト云
字ハ結前生後ノ働キアリテ納人向ト文ヲ鎖(シメ)タル仏理
ニ通セスンハ一体ニアルニモシク文字ニ達セスンハ一体ニアラサラン
況ヤ花ニ体シ月ニ埋レト文章ノ手透間ニ鼓舞ラサセル而度
モ聞テ感スヘキ段ナリ但シ諷ヲ辞トハ語路ノ長短ニ知ルヘキナリ

艶詞

紫式部

姫君例のなつかしくてくしつゝ給へる所
したりけれはいとらうたくてはくしのいとをそく
こほれかゝるもさすかにかゝるさまにてあるうちを
くやあるとのみてまへいらふつよのふかきも一月もえせさ
まちぬらいくらうをはなれしおきあかくおいさう
をとらんやまろくかひけにてまちかねしくうもある
人のんやうとかひてまうしたれうゑろくもはやく
みをおもあしくみてなめしてんやゝと見ゆ人のさま

おつしなとさふも世にけしふありてさふる母よつえりなん
ところさておもふこまやかなりけれはひよにてなけ
くてそかくしいへのおもてやうそて藤よりわり
て祝ひわれいとんかうしつて今まみんかれ
ありぬとみえかへりさもらてかりのあしとそけなりかきてせさり

狂云此段ハ源氏紅葉賀ノ詞ナルヲ更ニ此趣ヲ加ヘ文
ハ藤ノ隆房ノ艶詞ノ二字ヲ借リ去レハ源氏物語ヲ
敘情ノ文章ノ鑑トナセルハ筆ニ縦横ノ神アリテ人情
ヲ尽スニ委曲ナラスト云古文ナレ増シテ此段ハ紫上ノ源氏ニ
思ハレ給ヘル二十帖ノ中ノ骨節ナラン然レハ幼キ人ニ對シ

テ余所ノ恨ヲ負フニシクハ永ク世ニ在リテ添ハントハ幼女ヲスカセル詞ニモアラス好色深妙ノ本情ナルニ点頭(ウナツキ)玉フトハ女心ナランカト兎モ角モイラヘ玉ハスト云所ニ枕ヲ絆ト深キトノ浅深ヲモ知ルヘキナリ誠ニ其君ノ膝枕ニ天盤石ヲ以テ押スカ如ク深キモユエカ子給ヘルハ筆力不思議ノ艶詞ニシテ此間ニ甚深ノ情ヲ汲ムヘシ

戯ル仏ニ辞

鳥丸光廣

善猶もて往生なる一僕手をまつて閻浮檀金の鋳像なり多田新発意満仲の御仏とかやなりしに足なへのとれしかはこの御仏を南無あみた仏も十劫正覚のいにしへよりふるくおはしてなみなみならぬありしとて美女世田谷の浄土にかけ極重悪人よろしき往生は法師となりてとなふるならはよみかへりて有馬山の夕霧をはけて見まれは来迎あるへしとてありかたく思はれ猟師はいつもとみえしきくら山から此ものての胡桃とそなへまいらせんありと結縁の結縁ともなるへし極楽往生とそ申し出す南無あみた仏と

註云此篇ハ光廣卿ノ有馬ニ入湯ノ時ノ筆ト云ル行次ニ書傳ヘテ見ル所ノ語モ有ルニヤ然ルニ此篇ノ題名ハ結文ニ綺語ノ二字ヲ見ルヲ此二字ヲ以テ題セシカ中間ノ首ヲ辞ト見レハ古文ノ通文辞ニ似テ前後ニ序詞ノ文勢アレハ此等ハ漢家ノ辞ト云ハン但シ此卿ハ和家ノ家ナカラ此等ノ字格ニモ遊ヒ玉ヘル誠ニ文法ノ諫カヨリ塵ヲ憂ヘ自在トハ称スヘシ

情捨子ノ辞

芭蕉庵

駿河の国ふし川のほとりを行に三つ斗なる捨子のあはれけに泣ありけるやけ川の早瀬にかけてうき世の波をしのくにたへす露はかりの命まつ間と捨置けむ小萩かもとの秋の風こよひやちるらんあすやしほれんと袂より喰物なけて通るに

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにそや汝父に悪まれたるか母にうとまれたるか父は汝を悪むにあらし母は汝をうとむにあらし唯これ天にして汝か性のつたなきをなけよ

註云此辞モ通文ノ文勢ナカラ捨子ニ秋ノ風イカニト向ヤケテ如何ニソヤト序詞ニツヽケタル但シ辞ノ體ノ一体ニソ

倭文ニ辞ヲ立ル時ハ千般ノ法格アルヘシ誠ヤ富士川ノ瀬ヲハヤミ浮世ノ波ニニイヤケタル此川ナラテハ更ニ知ルニシ小萩カ露ハ源氏ノ奇ヲ借リ父母ノ憎愛ハ荘子カ天性ヲ云ヘル例ニ和漢ノ情達ニシテ是ヲモ漢家ノ辞ヨリ倭文ノ助語ヲ用得タリトスヘシ

夕暮ノ辞 并序

東花坊

むかし翁あり湖東の人と遊ぶとて武江に草行のおとつれしけるを東武に帰るへしといふ人ありて別をおくるはなむけや深よはの人をしけ人に侍て其の翁を師ありけれはこそむかしまり遠くむかしなる廣居士して翁あり

一詞とりて送る人とまうし跋をとりて送る人といふしむかしの翁をしのひて師かうふ人なるやなりそれの翁のやまとみちそ跋をあるへのあるもとなりてなれはなしむかしより旅にあるふ人は一鉢の僧とうせやして工商の旅はやからまたもあり妻子をかくら官禄の人ト家名をたてしまてせよあるて行る旅にあるそんあるいそいれてあるいハあるのも春秋をうくもてむかへてまたるを武士の旅にきうこうりはなれちかり今むかしりまもむ軍にたちはいの道のすかくしと物ぶ所の命もおもしたるにそのれなれとたゝさふ皆旅にして旅をとられさる人をと翁に旅衣の涙のあそうしい

おほやけのうちにあつまりて武陵一万里の旅におもむきけり
そは吟言のそれならぬをおもひけんにふさはしきまちるまし
あかさて人くはしのなみならぬ秋まで名月の月と忘ん
この二子里のかれ故人のおもかげの笠山の月にしのはれん
まして都路の関を隔てしに故人ありけんやのんふありけれ
此人をかれて梅の亭子と称して東花坊と此人を呼んとすなる
それ文梅の説かぬて梅のむめのほころびをいつはいふも
も梅の江南に色そめて風雅に辛酸の味をしりて
馬祖色倒の器量をもて此川へしこし此のふ
として此年新らしきこととやなりなんと梅隠閣にて盃を

あけてさりし此夕暮をおしむのみ
明らかにやれの人の旅人を世とすてかて此路に迷ひきと。
それまなりてあつて涙のなほなかみちにあつえきな。
都のうちて此駒より此中ふ暮をもとをそれなりやなきな。

注云此辞ハ十三句アリテ鴫立ノ句ハ発語ナレハ十二句ニシテ
六韻ナルヘキニ足ハ二句合セテ一句ノ意ナル故ニ六句ニシテ三韻
ナリ是ヲモ叶韻ノ一格トスヘシ起シハ其ヨリ序ハ老子ノ詞ヨリ
中比ハ毛詩ノ之秋ヲ摘ミテ和ニハ仲麿カ歌ヲ寄セ漢ニハ
王維カ詩ヲ合ハス梅子ハ傳灯ノ故事ニシテ師弟ノ称名
ニヤ　徳テハ西行ノ東(アヅマ)下リニハアラテ定家卿ノ佐野ノ屋ノ倫(リビ)

シサク云ニル本ヨリミタ暮ノ詞ヲ含メテ價借ノ人貧富ヲ旅立
ニ題ハセル誠ニ文章ノ奇法ト称スヘシ然レハ此全編ノ辞ニハ以上ク
漢文式ヲ守リテ別ニ倭文ノ一体ヲ立タル法ニ私ナキ證文
ナラン但シ此序ニ湖東ノ人トハ五老井ノ許六ニシテ其時ノ文参紫門
ノ辞ト題シテ彼カ文選ノ巻頭ニ置キヌ去レト辞ト題セシハ別ニ
筆格モアランヤト此辞ニ附テ論アレハ爰ニ此篇ヲ出セルナリ

鳥追辞

作者不知

やんらめでたや所や所の鳥追まつりて神の神
といふのはや殿も御子も遊ばしの村々の大いなる門にありて

清涼殿の仏の前に貴きかなやら左大将又右大将関白
殿下をはじめ御馬の鳥追ひ給ふと御あそび給ふにはや
所へ西田も此所を東も此所あらたに八子所を拝する
中の牧のよき馬を寿年先祖の御代あとをいやはやさ
おもひ田をかれくかゝる所にのぼりを立るはよ
稲子まつりね所の鳥を子来りとこかね所の鳥を
一万来りと麻毛ある駒にはけやもしりて雌羽も
来りて雄羽もまゐりまのよきあるあまり蹄
そなへあまたの蹄あり毎子の稼ぎよき稲を主有るとよ
田畑のそのはたけをとりもはやして鳥もはやしけりかつて

通る所よ追ふてそあれ田の外おもて芸かる了ら〳〵
西によらひの稲もよらひの気もよりとわたと〳〵ふて
出より西に夕日を流ふ千る追と流ふさて一年ふらく
かはへてまれいけ月(トツキ)山よ二月(タ)師走の月と九月といふ
て正月の月とま部月と称ふさ(中略)むかしよ紀小女郎
ふらはらろくやもむ仰氏の流ろくとそ古のちいろ

往云此章ハ正月ノ祝詞ニシテ鳥追ト云者ノ農民所々
ヲ云イアリク唱歌ナリ其者ハ背シ説経者ト云テ逢坂ニ
蝉丸ノ流ヲ汲テ三井ノ近松澄ヲ本寺トセリト今彼多羅
ト云者ナラン然ルニ此篇ノ分明ナラス卑凡ノ者ノ習ヒ傳ヘテ

鳥追馬ノ語ニハアラテ世ニ云フ武蔵坊弁慶ヲシレボベン
ト句讀セル如ク口授ノ違イ多メラン去レト此等ノ文章
ヲ云思九向レテ定ムヘキニモ非ス不ルニ其ハ文ヲ中略シテ
法格ノ外ノ風雅ヲ知レトナリ去ルハ五七ノ語路モナク假名真名
ノ配モナク二句長短ノ拍子モナキニ続ニ風雅ノ情ヲ見ニテ
此等ヲ辞ノ文鑑トセハ文章ノ家ノ活計ナランナリ去氏
此式ノ样弟二庭ニモアレハニヤ一聴附所ノ御法ニ及ヒ中牧ハ井田
ノ法ヲ云ヘル但シハ延喜上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ
見ヘタリ然ルヲ結語ノ妊婦ヨリ不意ニ仰法ノ二字ヲ云ヘル
妊婦ハ所々ノ祝詞ニノ仰法ハ彼カ常語ナリト見ルヘシ

箴類

閑居箴　　芭蕉庵

あら物ぐさの翁や日比は人のとひ来るもうるさく
人にもまみへじ人をもまねかじとあまたゝび心にちかふ
なれど月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝも
わりなしや物をもいはず独酒のみて心にとひ心にかたる
庵の戸おしあけて雪をながめ又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ
あら物ぐさの翁や

酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪

任云此題ハ大学ノ辞ヲ借テ閑居ハ閑ナリ小人ノ独処ナリ

ト朱氏カ註ニモ云ヘリトクト云トキハ此篇ハ隠者ノ常情ニシテ
或時ハ世ヲ疎トミ或ハ人ヲ懐シム本ヨリ心神不定ナリ
ハ頓阿モ風月ノ情ニ過タリト兼好法師ノ箴タル例ナリ
誠ニ此篇ハ前後ニ翁ノ字ヲ用イテ自己ノ散乱ヲ箴タル
首尾ノ文法ヲ見ルヘキナリ但シ此句ハ物字ノ発句トモ云フ
ヘキヤト故翁モ語リ玉ヘリトク常ニ我師ハ此古ヘヲ云ヘリ

猫恋箴　　支巴静

猫よ汝むかしは女三の宮の御懐にいだかれては彼柏木の大納言
のこゝろをもまどはし命婦のおとゞへあやしからぬ…

羅綾の膝にあそはむ時は朱ふさの男猫といひ秘てみすの
外の宿されて見れはあはれなる月日の松ねのまくら
ふるき人はる人目をもはゝからす今をさかりとうかれ
うかれあるく果ては野等(ノラ)猫のうきなにたちぬ
はてこれ今宵の鐘も撞くもせねはあはれ千年は織
の色にかはて稲荷の山の松をかそへてもよろしい敷く
ありきひそみて並はかれは此女とふみをかし
はるかなるおもあるきの力ともなりて用捨なきのはさ
又光宗わすれにしてはやしみに猫をありて帝前の
鏡の女もはさに心をまかせて川なかれ出き君の身の

時頭をふかくかくされたれとも有情の色さへまとひて猫は
一あまり名ひやしなへて人をに世まてもかならすからん
いはくひとりて猫ささにありけんと拂をなし海を渡
むかしに汝か辞とあやしむ人もありてはたるもき海を
そかしさきよしあとふ一しをこゝろえれくうらんさへ

評云 此篇ハ自利利他ニシテ詞ヲ寓スルニ潭雅ナリ其ル
ハ源氏ノ風流ヨリ枕草紙ノ寓言ヲ合セ或ハ徒然草ノ
古語ヲ借テ稲荷ノ山ノナカニ音ヲ採ル狐ト猫トノ二ツ交ハリ
ヲ云イテ又ト云字ノ徒名(アダナ)ヲ童子タル文筆ノ自在ハ
此篇ニ見ルヘシ然ルヲ孔子ノ語ヨリ人ノ色欲ノ猫ヨリ

モ浅岡敷ハ遠ク籠テ近ク慎サコソヤ然バ色ニハ遊ヘクテ
色ニ溺フヘカラストハ関雎ノ意モ此事ナルヘシ但シ巴静ハ太田
氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス素生ハ濃ノ竹ガ鼻ノ産ナリ
トワ